

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

平成25年度の問題作成に当たっては、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の目的と性格及びその役割を考慮し、従来の方針を継承しながら、現行の高等学校学習指導要領の理念に沿って、可能な限り新味を加えつつ受験者の学力を検出できるように配慮した。また、論理的思考力と感受性をバランス良く兼備した学力の重要性を考慮し、その達成度を判定できるものとすることを目指した。

以下は、問題作成部会として特に留意した点である。

- (1) 問題は昨年と同様に4問とし、「近代以降の文章」から評論と小説各1問、「古文」1問、「漢文」1問の配列とし、200点（各50点）の配点、80分の問題とした。
- (2) 出題の範囲は、「国語総合」「国語表現Ⅰ」の教科書レベルとし、受験者の基礎的かつ基本的な学力が反映されるように配慮した。また、受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように工夫し、各設問の難易度がバランスのとれた問題となるように考慮した。第1問は近代の評論を、第2問は近代の小説を、それぞれ素材に選んだ。
- (3) 問題の構成は、高等学校の国語教科教育の実態に即して、基礎的かつ基本的な学力が検出できるものとなるように配慮した。また、受験者の文章読解や思考過程の流れに沿う問題構成となるように工夫し、難易度においてバランスの取れた設問構成となるように考慮した。
- (4) 問題文、設問、リード文及び各選択肢の吟味には細心の注意を払うとともに、基礎的言語能力・認識力・想像力・判断力を含む総合的な国語能力を問うものとなるように工夫し、論理的な思考力と感性的な鑑賞力及び国語表現能力も判断できるように配慮して問題作成に当たった。平成25年度の受験者は、昨年より約14,000人増えて、約516,000人、平均点は約17点下がって、101.04点であった。センター試験は各科目の平均点6割を目安としていることから、やや難度は高かったかもしれないが、おおむね妥当な難易度の範囲内にあると言えよう。

2 各問題の出題意図と解答結果

問題ごとに、問題文の選定と出題意図や工夫を述べ、併せて受験者の解答結果を踏まえた試験問題に関する考察を述べる。

第1問 小林秀雄『^{つば}鐔』（『藝術新潮』1962年6月）から全文を出題。問題本文は『小林秀雄全集』第12巻（新潮社、2001年4月）による。

古道具である「鐔」を題材に具体的なエピソードを交えながら、〈実用と芸術〉、〈文化と精神〉といった主題について論じた文章である。読者の深い思考を促すような修辭的文体で構成されており、「鐔」「茶碗」「琵琶」など複数の例が筆者の主張へと結び付いていく内容である。〈実用の美〉の問題を掘り下げた文章の読解を通して、過去の文化事象を身近なものとして捉える視点に気付くことができるだろう。字数は約4,400字。

問1 基本的な漢字知識とともに、傍線部前後の文脈への理解力を問う問題。(ア)・(ウ)・(オ)の正答率が9割前後と高めで、(イ)・(エ)の正答率はこれらより若干低く、7割後半であった。日常

的に用いる言葉だけではなく、文章語に用いられる漢字語彙が豊かである受験者が優位に立ったと推測され、受験者の偏差を明確に区分できた。

問2 問題文の導入及び主意提示に当たる箇所、題材となる「鐔」に関する筆者の認識を適切に理解できたか問う設問。題材から引き出される議論の方向性を確認しつつ、全体の主旨の理解へ一歩踏み込むような問いとした。正答率は3割台半ばで、受験者の実力をよく反映する設問であった。また解答に当たって、問題文の表現を丁寧に読む必要があることを受験者に示すものとなった。

問3 工芸とそれにまつわる伝説の来歴に関する筆者の見解を受けて、「鐔」以外の例へと敷衍された主張の内容が理解できているか問う設問。正答率は5割台半ばであった。文章の流れに沿って、問題文の第二の部分全体を見渡し、その内容を把握させるものであった。

問4 工芸品の発生に関する歴史的観点からの論述が示されていく中で、実用と美の関係についての筆者の主張が理解できているか問う設問。問題文の主意の読み取りを確認する問いである。正答率は4割台半ばであった。傍線部の比喻表現を、問題文冒頭から用いられてきた比喻表現との連続性に即して把握することも解答の補助となっただろう。

問5 ここまでの筆者の主張が実景に重ねて述べられている最後の部分を読み、具体的な描写を通して問題文の主意が改めて記されていることを理解できているか問う設問。正答率は5割台半ばであった。文章全体の内容を押さえた受験者は、結びの記述で何に強調が置かれているかについて、的確に把握できたものと思われる。

問6 (i)は、問題文における表現上の特徴を問う問題。正答率は約6割で、標準的な難易度であったと言える。2番目に解答が多かったのは②であった。②の「はぐらかす」という言葉と、正解の③の「打ち消す」という言葉によって表されることに対する、問題文の書き手独自の表現意図としての妥当性の捉え方が違った結果とみなされる。

(ii)は、問題文全体の構成を問う問題。正答率が約4割(①)と低めである上に、それぞれの選択肢に解答が大きく分かれる結果となった。各選択肢に提示した文章の構成は大きく異なるものであるから、このような解答の揺れは、問題文の在り方よりも、そもそも受験者が文章構成という捉え方自体に慣れていないせいではないかと考えられる。

第2問 本年度は、牧野信一の小説『地球儀』（初出『文藝春秋』1923（大正12）年7月、出典『牧野信一全集第2巻』人文書院、1975（昭和50）年）の全文からの出題である。登場人物である「私」が書いた短編小説が作中に挿入されるという構成を持つ本作では、祖父の法要のために実家に戻った「私」と母、親せきとのやりとりを通して、母の父への思い、父と祖父との関係が語られるとともに、地球儀を介した「私」と父とのつながりが浮かび上がっていく。これを題材に、小説の巧みな展開を適切に把握できたか、地球儀をめぐる想起の中で次第に語りだされる「私」と父の関係、父に対する「私」の思い、葛藤を読み取れたか、など、基礎的な読解力を順を追って問う設問であった。電話敷設状況や海外地理への知識など、現代とは離れた時代を背景にするが、親せきまで含めた家族間の愛憎半ばする思いや戸惑いなどは、普遍的なものとして現代の受験者にとっても十分に理解可能なものであったと言える。またリード文や注によって、受験者の読解を補助するよう努めた。

問1 本文中の語句について、前後の文脈を踏まえた上で正確な意味把握ができているかを問う設問であった。おおよその正答率は(ア)が9割、(イ)が6割、(ウ)が7割であった。基礎的な問題であったが、文脈を踏まえた慣用句の意味を問う(イ)など、正答するためには語彙力に加え適切な読解力も必要であった。

問2 父の放蕩^{ほうとう}に対して母親が発したあきらめの言葉に対する「私」の態度の内実に関わる問題である。後に明らかにされる「私」の葛藤を理解する際に踏まえるべき「私」と周囲の登場人物との関係を、本文に即して捉え得たかを問うた。おおよその正答率は7割であった。以降の読解に関わる導入的設問としては適切な難易度であった。

問3 「お伽噺」に書き直そうと思っていた短編を思い出した「私」の、母親に対する心理、態度の変化を問う設問である。おおよその正答率は6割であった。小説内小説が登場するこの作品の展開を把握できたかが正誤を分けたものと考ええる。

問4 父親に対する叔父の発言と態度を踏まえた上で、それとは異なる思いも持ちながら、それを、母を含む周囲に言うことができない「私」のわだかまりを理解できたかどうかを問うた。おおよその正答率は6割強であった。

問5 父親に対する「私」の思いを踏まえた上で、今や同じく父親となった「私」がそれをどう捉え返しているか、適切に読み取れたかを問うた。問3で作品の展開を、問4で複雑な「私」の心情を問うてきたが、本問はこの作品に対する総合的な読解を試す設問である。したがって、難易度はやや高く、おおよその正答率は3割であった。しかし、識別力は高く、学力を確かめるのに適切な問題であった。

問6 「視点人物」「文末表現」「対比」「時間の構成と展開」「ダッシュ記号」など、小説における表現上の特徴についての理解を問う設問である。おおよその正答率は6割と全体から見るとやや高めであったが、表現の特徴を問う設問としては基本的な問題であったと言える。

第3問 『松陰中納言物語』は中世の擬古物語。出題箇所は巻二、東国平定の任を務める松陰中納言の弟右衛門督の話で、下総守邸に滞在中の右衛門督は、下総守の養女の姫君と一夜を過ごした翌朝、琴・扇・香箱にかこつけて歌を贈り、今宵の逢瀬を約束する。周囲に知られまいと苦心する姫君と右衛門督のほか、知らずに協力している弟君、察知して侍女に指示する母君など、錯綜^{さくそう}する思惑が読みどころである。分量は昨年度と同様1,400字程度、一見すると登場人物が多く入り組んでいるが、文自体は平易で語彙も重要語中心であり、落ち着いてよく読めば読解は容易である。贈答歌も凝った修辭法等のない平易なもので、常日頃に培われた学力を問うに適切な文章と考えて出題した。

問1 (ア)重要語「心もとなし」について、右衛門督の状況を踏まえ訳す力を見た。(イ)「飽かざりし」「あそばす」、(ウ)「いみじく」を文脈に沿って適切に訳す力を見た。いずれも傍線前後の文脈理解を必須としている。全体の正答率は4～5割。

問2 「に」「ぬ」の識別を問う基本的文法問題。「ぬ」の識別は頻出分野である。「むべに」が漢文にも出てくる「むべなり」の活用形であると気付くのがカギ。正答率は6割弱。

問3 「さればよ」という心情を通じ、前後を含めた正しい文脈理解がなされているかを見た。扇の歌Bを見て「あやしきこと」と思っていた母君は、犬の香箱の蓋の歌Cを見て、「さればよ」と思い、右衛門督との結婚は「行く末、頼もしきもの」だから、部屋を美しく整えよ

と侍女の右近に命じている。入り組んだ形で差し挟まれる母君の行動を読み飛ばさずに、丁寧に主語を押さえつつ、文脈全体を的確に把握することを求めた。

問4 「胸の露を晴らす（払う）」が、「心配事を取り除く」の比喩表現であることを理解した上で、こう発言する右近が「うち笑」い、姫君は「いと恥づかし」と思う、という二人の表情が意味するものを考えて正解を選ぶ。母君と同様に姫君の様子から「さればよ」と思っていた右近が、貴人も来ない（源氏物語の蓬生巻をふまえ、貴人の訪問を「蓬の露を分く」と表現）ととぼけた姫君をからかう、という流れである。正答率は5割。

問5 ABCの三首について、掛け合いの呼吸を理解しながら、適切な現代語訳を選ぶことを求めた。全体的に難解な修辞法はないが、Bの「(かなしさも忍ばんことも)思ほえず」だけが訳しにくく、要はこの適切な理解が分かれ目（「思ほえず」は最重要語「思ほゆ」の否定形）。物語の贈答歌では、答歌は贈歌の趣旨に反発して揚げ足をとる歌い方が一般的であるが、ここでもAの「逢った後かなしい気持ちでいっぱい」という訴えに対し、Bは「(私は)かなしさも人目を忍ぼうとも思われぬ(何か感じる心の余裕はない)」と反発している。3行の選択肢に焦ったのか、正答率が思いの外、低かった。

問6 表現に着目しながら文章全体の趣旨を理解することを求めた。表現の説明自体が誤っている①②を選択した受験者は少なかったが、表現の説明が一見合っている③④⑤（厳密には、小犬そのものは贈られていないので、④は表現の説明自体も誤り）について、内容と照らし合わせる段階で誤答を選んでしまう受験者が存外多く、残念であった。③「人目」を気にするのは周囲に知られないようにという心遣いなので誤り。④和歌の贈答は今夜の逢瀬の約束をめぐるもので、心情の変化を描くものではない。

第4問 素材は「海棠賦」の前に付された序文である。著者の張耒は北宋の政治家・詩人。唐宋八大家の一人である蘇軾に学び、蘇門の四学士と称された。自ら植えた海棠の花を見ながらの宴を楽しみにしていた作者は、左遷されて果たせず、翌年の春、再び花が咲いたという知らせを受けとる。以上の事実を述べた前半に対して、後半では、予測不可能な人間の運命に思いを致し、再び海棠の花と対面する日もあることを期して結ぶ。

全体に難しい言葉はない平淡な文章ではあるが、前半の事実を述べた部分では時間の流れを正確に読み取る必要があり、一年後に場面転換して、作者が思索を巡らせる後半に入ることを捉える必要がある。その後半部分は、極めて平易な語彙でつづられるがゆえに、しっかりと作者の意図を読み取る必要がある。作問に当たっては、基本的な語法を含む箇所を、文意を捉えて解答するように求めることを心掛けた。知識だけではなく表現に即して読み味わうことも含めて高等学校の学習成果が反映される設問作りに努めた。

全体の得点率は5割台前半にとどまったが、全く解答しない受験者も少なくないので、実質的な得点率は6割弱であろうか。受験者の学力を適正に測ることができたようである。語法を中心として学習の成果が出る問題であったとのおおかたの評価は、出題者の企図するところでもあった。第4問全体の得点率は5割強であり、24年度の約6割に比べると下がったが、23年度の5割弱、22年度の約4割、21年度の5割強と比べるとほぼ例年並みに戻ったと言える。設問別の正答率等を検討すると識別力は高かったと考える。

なお、問2の、二つの注がある部分を設問箇所としたことについては「避けるべき」との意

見があった。注を必要とする箇所を選定や設問との関係など今後も検討する必要があると考える。また、問8については、問7との重複があることについて賛否両論があった。出題者としては、解釈が難しい箇所であるため、相互に対照することによって理解の手掛かりを増すことを狙った。問8の配点が重くてもよいのではという意見もあった。出題者は、問7との相互関係を考慮して同じ点数配分としたものである。今後の問題作成に当たっては、高等学校での学習結果が反映される基本的な問題を中心とするとともに、注や本文の分量があまり多くなならないよう、注意を払っていく必要があるだろう。

問1 漢字の意味を問う問題。それぞれの漢字が文中でどのような意味で用いられているか、文脈から正しく判断して、同じ意味で使われている熟語を選ぶ能力を求めた。高等学校における基本的な学習を確認することを狙いとした問題であったが、意外にも(1)では正答「手記」を選んだ受験者は少なく、大問4で最低の約2割の正答率にとどまった。訓読では「手づから」と読む文字で、現代でも使わない言葉ではないが、身体部位としての手や手下などからの連想で人を意味すると考えた受験者もいたようで、誤答「名手」の選択率が正答を上回った。(2)は、6割台半ばの正答率で、標準的な問題であった。

問2 筆者の心情を問う問題。海棠の花に対して「茂悦」と表現していることに着目して作者の心情を考えさせた。新傾向の問題だったこともあり、正答率は5割に満たなかった。肯定的心情であることは多くが理解していながら正答を選べなかったのは、設問箇所までに書かれている筆者の状況に注意が向かなかったためだろうか。しかし、誤答は分散しており、設問としては適当であった。

問3 文意を問う問題。漢文の基本的な語法である「不復」の部分否定が理解できているか、「省」がこの文章の流れの中では「見る」ことを意味していることが読み取れているかを問うた。正答率は5割台前半、誤答は、明らかな誤答である①以外に分散しており、設問としては適当であった。

問4 文意を問う問題。文章中の時間の流れが正確に把握できているかを問うた。ここで内容が転換することに注意を向けさせる意図もあった。約6割の標準的な正答率であった。ただ、海棠が春咲く花樹であることは注に明示してあるにもかかわらず、本文中の「周歳」を歳末の意味に解して誤答を選んだ受験者が少なくなかった。

問5 上下点を含む返り点の付け方と書き下し文との組み合わせを問う問題。文章前半の内容を短く言い換えた部分である。前半部と連動して内容理解を促す設問として作成した。語法では、多義語の「与」と軽い接続の語としての「而」の理解が必要である。正答率は5割台前半であり、設問としては適切であった。

問6 文意を問う問題。筆者の体験を一般化する転換点に置かれた一文である。その文章の流れを正確に読み取って「如此」の指し示す内容を考えた上で、漢文の基本的な語法である「不可」を解釈できるかを問うた。「事」を「知る」という抽象度の高い文なので正答率に不安があったが、ほぼ6割が正答しており、適切な設問であった。

問7 書き下し文と解釈との組合せを問う問題。漢文の基本的な語法である反語を中心に、文意が理解できているかを問うた。否定文を否定する複雑な構文である上、ロジックの反転があるため、受験者の理解を助けるために解釈と組み合わせた。「安くんぞ」と訓じる反語で

あることは8割近い受験者が理解していたが、「此の花」の「此」を場所の「ここ」と解釈した受験者が約3割おり、正答した受験者は5割台前半であった。

問8 文章全体から筆者の心境を読み取れているかを問うた。人生観とも言える深い内容であったため、問7とあえて連動させることでヒントとした。しかし、不遇ならば悲観的になるだろうと推量して誤答を選んだ受験者が多く、正答率は4割台半ばにとどまった。

3 ま と め

基本的な問題構成は前年度を引き継ぎつつ、問題文の選定に力を傾けた。

評論は、工芸品の造形から戦乱期の人間の生と死の捉え方まで考える、根源的な問題を扱った。小説では大正期の作品を取り上げ、全文を掲載した。小説の中にもう一つ小説が含まれるという高度な工夫が施されている特徴のある構成であったが、主人公の家族への思いは十分理解されるものであり、登場人物の心情のみに絞り込まれない、問題文の総体的な理解を問う設問を志向した。古文は、登場人物それぞれが巧みに描き分けられた素材文で、和歌に関する設問も含めて学習の成果を問うものとなった。漢文は、流転する人生を花の季節の到来と重ね合わせて考えさせる、具体的な内容と作者の思索との二つの内容を含む素材文を用い、時間の流れや作者の思いを読み取らせた。

以上のように内容的にもバラエティがあり、また、まとまりを持った問題文を扱えたのが一つの成果だった。全体の平均点が下がったことから、特に評論は難易度が高いという意見もあったが、高等学校教科担当教員からの意見・評価では、採用した本文はどれも高等学校学習指導要領の趣旨をしっかりと踏まえた、適切な文章から出題されていると評価された。ただし、解答時間の時間的な制限の問題や注の多寡などについては、今後留意する必要もあろう。今後とも、設問の適切な難易度の維持に心がける一方で、教育現場に新鮮なメッセージを送り続けることの重要性を認識しながら問題作成に臨むことにしたい。